

地域スポーツクラブの支援による学校運動部活動の活性化に関する研究

愛知県三河地域における高等専門学校オリエンテーリング部支援の事例から

A study about supportive activity from community sports club to students

-The case from orienteering programs at one of the schools in Aichi Prefecture-

松澤 俊行

I. 研究の目的

現代日本では、学校運動部活動の衰退が著しく、国の振興策により促進される総合型地域スポーツクラブの設立や育成も、十分な成果を挙げるには至っていない。学校運動部と地域のスポーツクラブが連携し、共に発展を図ることが求められている。

筆者はかつて、ノルウェー南部の地域オリエンテーリングクラブが、教育的配慮の行き届いた児童生徒向けプログラムを学校に提供している事例を調査し、報告した(松澤 2007)。本研究では、ノルウェーの事例を参考に、プログラムを計画、実施して、学校運動部活動の活性化を試みた。その効果を分析し、学校運動部活動および地域スポーツの活性化を促進する要因や、阻害する要因を明らかにしつつ、地域スポーツクラブと学校運動部の双方に有益な連携方法を提示することを本研究の目的とした。

II. 研究の方法

本研究では、まず、文献により、学校運動部活動や地域スポーツに見られる問題点を整理した。そして、学校運動部支援プログラムに筆者が関与しながら観察を行い、効果を測りつつ、問題点を検証した。具体的には、愛知県三河地域に位置する国立T高等専門学校のオリエンテーリング部に対し、同地域に本拠地を置く地域スポーツクラブ、Mオリエンテーリングクラブが支援活動を実施した。なお、Mオリエンテーリングクラブは、「非営利団体」で、「多世代・多志向の会員が所属」する、「単一種目型」の地域スポーツクラブである。

筆者は、「T高専オリエンテーリング部の臨時コーチ」という立場を取り、各練習プログラムの立案をし、実地での指導を行った。練習後には毎回、関係者へのアンケートとヒアリングを実施した。

このような関与を経て得られた情報を基に、対象とする学校運動部の変化について分析、評価し、過去の他の研究によって示された知見に対する再検討と、新たな知見の提示を行うことを試みた。

III. 地域スポーツと学校を取り巻く問題

先行研究により、日本の地域スポーツクラブや、学校運動部に関する問題点が数々指摘されている。

堺(2006)は、地域スポーツの問題点として、「地域スポーツ行事の問題」「スポーツクラブの問題」「スポーツ施設の問題」「スポーツ指導者の問題」の4点を挙げた。堺は、

こうした問題点を打開する方策として、総合型地域スポーツクラブの育成に期待を寄せ、総合型地域スポーツクラブのキーワードとして次の三つを挙げ、あるべき姿を提示した。

1 三つの多様性

世代、種目、競技レベルの多様性。

2 あるものとあるものをつなぐこと

指導者をつなぐこと、施設をつなぐこと、学校をつなぐこと、生涯スポーツと生涯学習をつなぐこと、スポーツと福祉や医療をつなぐこと、など。

3 自主運営

行政がしてきたことを住民が行い、自分たちの地域は自分たちで守る必要がある。

さらに堺は、総合型地域スポーツクラブが目指すものを四つ列挙し、社会問題の解決を期待している。

1 ライフステージに応じたスポーツ活動

熟年男性の地域離れ、若者の地元離れ防止を期待。

2 子どもの健全育成

教育問題の解決を期待。

3 中高齢者の健康づくり

医療費の削減を期待。

4 コミュニティ形成

「スポーツの公共性」による、共同体再生を期待。

しかし総合型地域スポーツクラブは、諸問題により、期待ほどには育成が進んでいない。黒須(2007)は、次のように大きく七つの問題を指摘した。

- 1 既存の団体にとって、総合型クラブのメリットやイメージを描くことが難しい。
- 2 団体間の意見の違いから、総合型クラブ創設の合意形成に至らないこともある。
- 3 既存の団体を寄せ集め、数合わせだけして看板を総合型に変えたクラブもある。
- 4 地域住民のクラブ運営への参加が消極的で、行政依存が目立つクラブもある。
- 5 他の事例をまねて安易にクラブづくりに着手しただけのクラブもある。
- 6 補助金が切れた後に運営が立ちゆかなくなるクラブもある。
- 7 総合型クラブと学校運動部活動の連携が、当初の構想どおりに進んでいない。

学校運動部に目を向けると、榎(2007)が指摘するような、数々の問題点が挙がる。

＜生徒数の減少がもたらす影響＞

- 1 特定学年の空洞化
- 2 部員の絶対数の不足
- 3 部員の興味の分散、参加率の減少

＜顧問教師を取り巻く問題点＞

- 4 顧問教師の高齢化、若手顧問の減少
- 5 指導時間の不足
- 6 顧問自身の競技経験の不足
- 7 顧問と部活動とのミスマッチ
- 8 自己流の指導

＜その他の問題点＞

- 9 種目選択の制限
- 10 志向性選択の制限
- 11 部活動以外のスポーツ機会の不足
- 12 長期的育成観の欠如

榎は、総合型クラブと学校の運動部活動が「協働」することが大事である、との考えを示す。

こうした問題は、総合型クラブだけでなく、単一種目型クラブとして地に足の着いた活動を続けるクラブにも解決できるものと考え、本研究を進めた。

IV. 日本のオリエンテーリングの歴史と組織

オリエンテーリングは、北欧生まれの森のスポーツである。日本では、1969年にオリエンテーリングを統括する公的組織が設立され、当時は日本オリエンテーリング委員会という名称で呼ばれた。その後、1991年に日本オリエンテーリング協会（略称：JOA）へと名称変更がなされた。JOAの下部には、43都道府県のオリエンテーリング協会が位置する。日本体育協会下部組織の各都道府県体育協会への加盟は、各都道府県オリエンテーリング協会の意向に任せられ、現在は5府県協会のみの加盟にとどまる。

各愛好者の、JOAへの競技者登録は都道府県協会を介してなされる。2008年末時点の競技者登録者数は約1,300名であった。地域オリエンテーリングクラブの都道府県協会への登録は、各都道府県協会が設定する規則と、各クラブの意向に左右される。日本の地域オリエンテーリングクラブの活動は、各々のクラブが定めたルール の範囲内で行われ、内容は柔軟性に富んでいる。反面、周辺社会との関係が弱い。国の機関を頂点とした上部組織が定める規約に沿って、地域に根差した活動を行うノルウェーの地域オリエンテーリングクラブとは対称的である。

愛知県は、オリエンテーリングが盛んで、県協会内の組織整備も進んだ地域であり、過去には世界オリエンテーリング選手権大会も開催された。開催地域にはMオリエンテーリングクラブ事務局所在地の岡崎市、T高専オリエンテーリング部本拠地の豊田市も含まれていた。ただし、オリエンテーリングに対する、関係者以外の認知度や関心はさほど高くなく、本研究所の過程で明らかになった。

V. 地域オリエンテーリングクラブによる学校運動部活動支援の事例分析

本研究における学校運動部支援プログラムは、ノルウェーでの事例を参考に、下記の枠組で実施した。

- 1 簡単な説明の後、T高専部員の練習に移る。
- 2 ある程度の時間が経過した後、コーチ役のMオリエン

テーリングクラブ員が見本を見せる。

3 T高専部員の練習の後半に入る。

細かなプログラムの内容については、市販される最新のオリエンテーリング技術書を参考に決定した。

プログラムは2008年6月から2009年1月にかけて実施され、プログラム時に部員に配布したアンケートには、次のような回答が見られた。なお、部員A～Hは、活動へ活発に参加した部員の内7名の仮称である。部員Hは下記に紹介する回答を、初参加の部活動後のアンケートに記入している。

・部員A,2009年1月25日のアンケート回答より

「クラブの活動がにぎやかになってきました」

・部員B,2008年11月19日のアンケート回答より

「今、部活を僕も部員のみんなもとても楽しんでいるので、このまま続けたいです。大会ではまだ結果を出していませんが、これから練習をして着実に成績をあげていくのが目標です。」

・部員C,2008年11月19日のアンケート回答より

「他人とも地図読みで意見交換をすることができ、勉強になる。走る練習も他人と競い合うことができるので、よいモチベーションを保てる。」

・部員D,2009年1月25日のアンケート回答より

「毎週教えてもらって、昨年よりオリエンテーリングが上手になったと感じました。来年度以降も、私たちの練習を見ていただきたいです。」

・部員E,2009年1月28日のアンケート回答より

（部活動には）かなり満足

「昔よりもまともに活動するようになった。」

・部員F,2009年1月25日のアンケート回答より

「評価してくれる人がいると、反省が濃くなる。なので、これからも評価してほしいと思います。」

・部員G,2009年1月25日のアンケート回答より

「(Mオリエンテーリングクラブの) 多くの人には、大会ごとにいろいろなアドバイスをさせていただいて、とても感謝しています。自分としては、テニスと並行してオリエンテーリングを続けていこうと思っているので水曜日の練習には、あまり多く行けないと思いますが、(中略) できるだけ多く参加して、オリエンテーリングを楽しんでいきたいです。」

・部員H,2008年11月19日のアンケート回答より

「今日は初めてのオリエン部で、(中略)、難しいと感じた。でも、(中略) 楽しそうだなと感じた。(中略) 徐々にできるようになっていきたいと思う。」

また、顧問のN先生に対し、2009年1月14日に行ったインタビューでは、

「今年度は、学校の広報にクラブ紹介を載せたり、同窓会誌に活動報告を載せたりしました。部員を紹介する、ということで数を確認したところ、20人近く、15人以上名前が挙がりました。学生たちの活動は、意欲的だと感じます。」

と、部員の増加と、部員の意欲の増進を裏付ける話が紹介された。N先生からは以下の、Mオリエンテーリングクラブ員への感謝の言葉も聞かれた。

「いろいろと助かっています。(中略) 考え方は、勉強にも結び付いているようです。部活動を通じて『問題解決力』を上

げてくれるといいんじゃないか、と思っています。」

Mオリエンテーリングクラブ員で、本研究のプログラム実施以前の 2007 年度からT高専部員たちへの指導を行ってきたK氏は、次のように述べた。

「プログラムに沿って着実に力をつけていると感じます。指導はタイミング良く、今後が楽しみです。」

(2009 年 1 月 8 日受信のEメール内容を一部修正)

「いずれにしても実地訓練が圧倒的に少ない中で指導効果は着実にあがっていると思います。」

(2009 年 1 月 8 日受信のEメール内容を一部修正)

さらに、名古屋市内の中高一貫私立校である「T中学・高校」オリエンテーリング部の顧問を務めるO先生からは、下記の言葉が寄せられた。

「T高専ががんばっているのは、(中略)以前にも感じていました。アップ時などにもT中高の方をうかがい見る視線を感じ、また、レース後に集まって地図を見ながら一生懸命に反省している姿や表彰者を中心に写真を撮る姿が印象的でした。」

(2009 年 2 月 1 日受信のEメール内容を一部修正)

このように、プログラムの内容と、プログラムを通じてのT高専オリエンテーリング部の変化については、関係者から概ね肯定的な評価が得られた。この評価から、部活動は活性化されたと考えられる。

VI. 考察

Mオリエンテーリングクラブの支援は、実際にT高専オリエンテーリング部活動に見られた「指導者の高齢化」、「指導時間の不足」、「指導者のミスマッチ」、「自己流の指導」という問題を直接的に解決した。また、「部員の絶対数の不足」、「種目選択の制限」、「部活動以外のスポーツ機会の不足」といった問題の解決にも、間接的な形とはいえ、貢献した。

一方で、「特定学年の空洞化」、「長期的育成観の欠如」といった問題が未解決のまま残った。地域スポーツクラブの統合、すなわち総合型化を進め、学校運動部の支援を行い、こうした問題の解決を図る取り組みが各地で見られる。とはいえ、総合型地域スポーツクラブの設立、育成がなされている市区町村は、2008 年 8 月時点で全国の 6 割に満たない(文部科学省)。この数字は、総合型クラブの設立、育成に適さない地域があることを示唆している。

総合型地域スポーツクラブが適さない地域では、学校運動部の側に開放を期待すると共に、単一種目型の地域スポーツクラブの、個別の働きかけを積み重ねることで問題の解決を進めるべきであろう。継続すれば、学校運動部側からの開放の動きと地域スポーツクラブ側からの働きかけが、相互に不足の点を補完し合って、地域住民の強固な結び付きを生むことが期待できる。その結果、理想的な総合型地域スポーツクラブの設立、育成時と同様の効果がもたらされることが考えられる。(図1、図2を参照。)

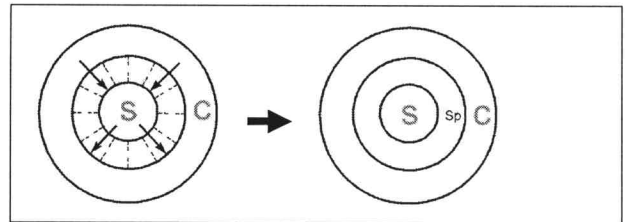


図1 地域と学校が総合型地域スポーツクラブでつながる図式

地域(外側の円 C=community)と学校(内側の円 S=school)を、複数の要素(CとSの間に位置する四角形のマス)が相互に関連して、つなぐ。各々のマスがスポーツクラブを表しているとするれば、これは総合型スポーツクラブの姿である。Spは、スポーツ(=sports)を表す。

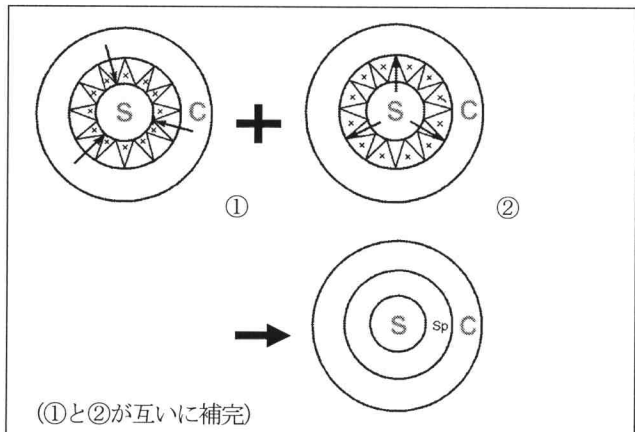


図2 地域スポーツクラブの支援と学校運動部の開放が相互に補完し合い地域と学校がつながる図式

①で、外側の円から扇形のマスを通して内側の円へ向かう矢印は、単一種目型の地域スポーツクラブの、学校運動部への支援を表す。②で、内側の円から扇形のマスを通して外側の円へ向かう矢印は、個々の運動部の地域への開放を表す。(それぞれ、逆方向の扇形のマスには便宜的に、×印を付けた。)単一種目ごとの取り組みも、積み重なり相互に補完し合えば、総合型と同様、地域と学校をスポーツで強固につなぐ効果を生む。

VII. 今後の課題

本研究の、題材や対象としたオリエンテーリング、三河地域、高等専門学校は、いずれもある種の特殊性を有している。本研究の成果の一般化がどこまで有効か、今後、一層の検討が必要である。

<主な参考文献とウェブサイト>

- 榎敏弘 2007,「もっと知りたい! Q&A」,黒須充編著『総合型地域スポーツクラブの時代1 一部活とクラブとの協働一』創文企画 127-163 頁
- 黒須充 2007,「総合型地域スポーツクラブの基礎知識」上掲書 9-26 頁
- 松澤俊行 2007,「地域スポーツクラブによる若年競技者養成に関する基礎的研究」愛知教育大学卒業論文
- 堺賢治 2006,「総合型地域スポーツクラブの必要性」,愛媛大学教育学部保健体育紀要 5号,41-46 頁
- 文部科学省ホームページ
- http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/